salamander in the circle

第三十六章　黄金門の詐欺師

峯村　明

Salamander in the circle

第三十六章の登場人物		
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
シパド	……	ベレオーサ総督
ドゥル	……	シパドの兄　ベレオーサ家当主
アマセオ	……	鳥を守護神とするシトリ族の出身
レル・ヴァリス	……	エウメロスの王室付近衛隊長
ヤスウ	……	ネウトラ評議会・学術調査団の団員
アルチニア	……	化学者団の元代表メンドルプの側近

これまでの主な登場人物		
ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー
	ティコ	科学者
	ナシル	本部・事務職員
	ダーヴェ	学術調査団・団長
	ヒューダー	学術調査団・団員
エウメロス王国	ヘルガ	王女
	カール	王子　ヘルガの音
	ヴァリス将軍	レルの父
	ロウナス	国務省の高官
	アンテロ	レルの副官
	摂政	亡国王の弟
ケストル王国	パウル	国王
	ウルリク	第三王子
	ヘンリク	ウルリクの息子
	ホペオクー	ケストル人の美女
	ソルド	闘技場の警備隊長
黄金門市	皇帝	皇帝
	パソネル	バイスロイの参謀
アンベレオ	ソラン	祭祀長
	レガリオ	国王
世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長　マミヤの父
	オマキ	ホシナの妻
	キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ゴン	ホシナ族の男　（ヤサカオ族出身）
	サノヒコ	王に仕える役人
	フツヌシ	王に仕える者　将軍
	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	チドリ	アマセオの妻
	ハマツ	チドリの養父
	タマシギ	ハマツの実子
	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者
	マミヤ	ホシナ族の娘
	スクナ	世界の果ての島の王に仕える者
	コタエ	〃
	トヨケ	タカミムスビ族の長老
メッサナ市	パンテオラ	メッサナ市の総督
	メルノ	音楽家
	バルダリス	メッサナ総督家の一人　臨時総督代理
	メンドルプ	メッサナ化学者団の代表
	バラム＆バランケ	双子のジャガー　パンテオラの部下
冥界	冥界王	冥界の王
	ベネトナシュ	死神
	テクトリ	最下層ミクトランの主
	プラトニオ	メッサナを追放された化学者

目次

黄金門の詐欺師
526.
527.
528.
529.
530.
531.
532.
533.
534.
535.
536.
537.
第三十六章のあとがき
これまでのあらすじ
奥付

黄金門の詐欺師

526.

「ところで、ここからどうやってメッ」
　言いかけたところで、バイスロイの片手がすっとあがった。そして穏やかに微笑みながら、
「その名を口にしてはならん。とくに、ベレオーサ市へ入ってからは。ヘタをすると首が飛ぶ」

「なんと剣呑な！」
　レル・ヴァリスも笑みを返しながら応じる。

　ふたりはにこやかに笑いながら物騒な会話を続けた。

527.

　メッ……ベレオーサ市郊外南へ数百キロのところに、ルカティマという地がある。いつの時代のものともしれない、風化した巨大な方形の石の建造物が四つあり、それらがひとつの中庭を取り囲んでいるという図だ。かなりの年代が経っているらしく、建造物は深く土に埋まっていて、その一部が地表に出ているというわけである。

かつて……
ダーヴェからの要請でヒューダーがミクトランへ向かった際、メッサナから南へ向かったのがほかでもない、この地だった。つまり、ルカティマとはミクトランへの入口であり、出口なのだ。そしてここが作動するには、天の川の暗黒部分が真上に重なる時という、鍵が必要になる。ゆえに、鍵がなければ作動もしない、ただの古代遺跡である。

アンベレオの連中はそのルカティマを使っているのだ、とバイスロイは言った。

レル・ヴァリスは笑ったままの顔をしかめた。意味がわからない。ルカティマとは、ミクトランと繋がっているだけじゃないのか？

「ミクトランとは、古代の転送システムが集中している場所だった。死神がシステムを壊してしまい、使えなくなったが、そのシステムを構築できる者がいた。誰だと思う？」

「————」

「アンベレオの神官たちだ。現在、ルカティマはアンベレオ本国の金星神殿と繋がっている。ルカティマに入ればアンベレオに出られるわけだ。そしてだ。神官たちがいれば出入り口は自在に作れる。どうやって？　明日の晩、お目にかかれるさ」

＊

翌夕刻。月の出と共に儀式が始まった。地平線上に昇ってくる満月は妙に赤みがかっ

ているように、レル・ヴァリスには見えた。儀式を万全のものにするために天体の力を借りるのだという。連日飲食物の中に少量ずつ盛られてきた麻薬のせいで、人々は常時高揚していたが、その説明に高揚はさらに増した。中には老人も、年端も行かない子どももいた。飲食物はだれにも分け隔てなく配られていた。バイスロイの注意を受けて、レルもアマセオもアンベレオの食べ物にはほとんど手をつけていなかったが、興奮してはしゃぐ子どもたちを見るのはいい気持ちのものではなかった。

　周囲をかがり火に照らされた広い空き地の真ん中に、十人あまりの神官が円陣を組んでいる。円陣の中央の地面に黒い色が鏡のように月光を跳ね返して輝いている。黒曜石の輝き。神官たちは両手の指でなにやら印を結び、″祈り″始める。単音のリズミカルな繰り返しは子どもにもすぐに覚えられるもので、敏い子どもは神官の真似をして両手の指をからませ、″祈り″についていく。それはやがて参列者の大合唱へと発展する。中央に互いに顔を合わせるように内向きに向かい合っていた神官らが、徐々に後退し始める。それぞれ後ろ向きに下がっていく。それにつれて黒い輝きも広がっていく。中央がうっすらともやがかかったようにかすんでいる――

「煙を吐く鏡――！」誰かが陶然と叫ぶと、おお、とどよめきが広がった。

　神官と神官の間を金色の細い光が走る。神官らを頂点に、頂点をいくつも持つ星の形が描かれていく。人々は″祈り″を唱えながら憑かれたように星のなかへ向かう。ひとり残らず、吸い寄せられるように。

（これは魔術、黒い魔術だ）バイスロイはつぶやく。

　人々は星のなかに消え、国王の一団、高位の祭司の一団が続く。

（行くぞ。ふたりとも）

神官たちもが星のなかへ消えてしまうと、金色の星はひときわ輝き、沈黙した。だれもいなくなった空き地を、赤い月が見おろしている。

528.

ベレオーサ市ルカティマでは盛大な歓迎が待ち受けていた。現地だけでなく、総督府までの沿道はもちろん、市中すべてがアンベレオ王とその一行を迎えるのに夢中になり、熱狂していた。

一音楽生をみんなして追い出したあの事件から始まって、いきなり現れたアンベレオ軍によって前総督パンテオラを失い、次から次へとおぞましい事件が絶え間なく続き、いわば虐待されたこの街の市民がアンベレオの王を喜んで迎え入れたわけがない。
この日のために温存されていたのは、市が封鎖されるのと同時に閉じこめられたものの豊衣飽食の高待遇を受けていた外国人や旅行者たちである。彼らに提供された飲食物に例の麻薬が盛られていたのは言うまでもないだろう。

メッ……ベレオーサ市にいた外国人旅行者のひとりヤスウはそのことに気づいていた。だてに評議会に属していたわけではないのだった。彼は非メッサナ市民が召集された時、真っ先に応じた。バイスロイがいなくなり、バラムが連れ去られ、ダーヴェとヒューダーとが出頭していき、マミヤまでも帰らぬとあっては、彼に残された道は自ら虎穴に入ることだったのだ。

そしてヤスウは、聖地ルカティマなる神秘の場所で、思いがけないものを見た。すなわち、踊りに興じるエウメロスの王室付近衛隊長の姿を。

（おいおいおい！！）
（あ）
（あ、じゃねえよ！！　ナニやってんだよおめえは！！）
（いやー、慣れとは恐ろしいな。いちんち踊ってたらすっかりクセになってしまった！）
（クセになるまで踊ってんじゃねえ！　こちとらみぃんないなくなっちまって、悲壮な覚悟でここまで来たっていうのによお！！）
（いかんいかん、ついステップを踏んでしまう。さてヤスウ、応援に来たぞ、安心しろ）
（ノリノリで踊ってるやつに応援されて安心できるか！！）

529.

「え！　バイスロイのおっさんとは先刻までいっしょだったってのか？」
「ああ。なにしろ人が多くて騒然としてたもんだから途中で見失ってしまったけどね。ベレオーサ市へ入ったのは確かだ。それと、行列の一団のなかに、イリチヤがいるはずなんだ」
「――てことは――ベレオーサ市に全員集合、てわけか」

＊

　そのバイスロイはすっかり拍子抜けしていた。これでもかというくらい派手派手な格

好をしていたのは、ドゥルの手下に見つけてもらうためだったのだが、どうも度が過ぎていたらしい。彼が歩いていくと誰もがうやうやしくお辞儀をして道をあけてくれるのだ。王の招待者のしるし、銀の勲章はどういうわけか今、アマセオの左肩で輝いているから、人々にお辞儀させるのはもっぱら彼の立派な身なりと生来の偉そうな、もとい、堂々とした態度によるものだった。

　実は肝心のドゥルの手下たちはまだアンベレオの首都の下町あたりをうろうろしていた。かの晩、屋敷を放り出された人間がまさか王のところへ駆け込んでいたとは、そして王にくっついてベレオーサ市へ戻ってこようとは、考えもしなかったのだ。ドゥルが気の毒になるくらい、使えない手下たちだった。

*

　王一行はベレオーサ入りしてから七日間かけて市内をまんべんなく練り歩き、祝福を振りまき、最終的に総督府に到達することになっている。
「この七日間が勝負だ」レル・ヴァリスは真顔でそうつぶやいた。

　八日目には儀式が行われるからだ。

530.

「――数値にすれば55ありますが、文字の数は8しかありません。三番目の文字は五番目の文字の三分の一です。
これを六番目の文字に足すと、その根が最初の文字の値分だけ三番目の文字より大きい数になります。それは四番目の半分です。五番目の文字と七番目の文字は同数です。また最後の文字も最初の文字と同数です。この二つを合わせると六番目の文字と同数になりますが、六番目の文字はしかし三番目の文字の三倍より四つだけ大きい。さて、私はなんという名？」

（数式は第九章のあとがきを参照）

　真っ青なローブをまとった異国のすばらしい美女が魅力的な笑顔で繰り出す謎々を、アマセオは若干苛立ちながら辛抱強く聴いた。その左肩に銀色の勲章。バイスロイがもう要らないというので、もらい受けたものだ。この勲章のおかげでアマセオは、アンベレオ王国直轄地『化学者の館』に入ることができたのだった。

「アルチニアさま」
　ついにアマセオは謎々を遮るように言った。「私はアンベレオ王の使いにあらず。あなた方の投じた暗号を解いた者です」

　アルチニアと呼ばれた美女の目が、はっと見開かれた。そして笑みを湛えたまま、突然の訪問者を館へ招じ入れた。

＊

「『アレ』を解かれたとおっしゃいましたわね。まことに？」

「アンベレオ王国がメッサナ市を手に入れた記念に造った黄金の硬貨。私どもが解析しました。その結果……」
　アマセオは言いながら懐からその硬貨を取り出した。
「……」
「あと七日ののちに、黄金では無くなる。違いますか」

　アルチニアは今度は目を細めてじっとアマセオを見ていた。「あなたはいったいどこから来られたのです？」

「ずっと東方、あるいは西方。この場所とは地球の反対側あたりにあるくにが、私の故郷です」

「ということは……この大陸とも、この街とも、無関係の地域では？　そんなところからなにゆえ？」

「この度の一連のできごと、アンベレ王国は国内外に対して、なんの論評もしていません。自治領メッサナが無くなり本国に組み込まれたという発表があっただけです。何が起こったのか明らかにされていない。
しかし、メッサナで暮らす人々が理不尽に脅かされたことは事実です。この地ではさまざまな能力、貴重な才能、多くの人材が培われた。それが理不尽にも失われた。命を失った者もいる。しかし、それ以上に、肉体の死以上に問題なのは、魂を奪われることです。
メッサナ滅亡の本当の姿は……人の魂に対する冒涜です。人が本質を生きることを貶めるものです。メッサナ侵略とはそういうことなのです。だから我々は遠く離れた場所に住んでいようと、黙っていられないのです」、「……現実的な問題として、メッサナ北方の広い地域では放射能雨が降り続け、南方はアンベレオ王国領、メッサナ自体が厳重に封鎖されている、となれば、外部から手出しできることは無いに等しい」

「……」

「我々にはなにもできないのか。絶望的な気持ちのなかで、この硬貨を調べた者が気づいた。時が来れば、これは黄金ではなくなる、と」

531.

「アルチニアさま、どうか教えてください。ほんとうにそのようなことが可能なのですか！？」

　長身の美女はアマセオにじっと目を当てたまま、わずかに、ゆっくりと頷いた。微笑みは消えていた。
「詳しいことをお話し、理解していただくには、たくさんの予備知識と時間が必要です。しかしひとことで言えば、それは可能です。なんとなればあたくしたちは化学に心身を捧げた者でありますゆえに」

　アマセオは激しい動悸を抑えつつ、からからに乾いた唇を舌でそっと舐めた。
「もうひとつ、教えていただきたいのは……なぜ″その時″なのか、ということです。いったいどんな理由があるのですか！？　コタエさまは……硬貨を解析した者ですが……さすがにそこまではわかりかねる、けれども、なにか理由があるはずだと。それも、きわめて――」

「アマセオさま、とおっしゃいましたわね。空も陸も地下も、メタ次元までもが封鎖されているこの危険な地に入り込み、アンベレオの直轄となった『化学者の館』にまで

入って来られた。それだけで驚嘆を禁じえません。あなたは、あなた方は、本気なのですね」

　もちろんだと、アマセオは頷いた。

　かつて、『化学者の館』の長、メンドルプは侵攻から化学者たちを守ろうとアンベレオ兵の前に立ちふさがり、抵抗した。
　アンベレオが欲しいのは化学者団だったから彼らの安全は担保されていたが、アンベレオは面倒な年寄りを排除するためにこう言った。
「そこをどけ。さもなくば市中に火を放つ」

　あげく、メンドルプ氏はその場で力ずくで外へ引きずり出された。アルチニアが駆け寄るいとまもない出来事だった。メンドルプはたったひとりで、アンベレオ兵の嘲弄と罵倒のなか、館を去った。

「さっさと出て行け。じじい」「命ばかりは助けてやる。どうせ長くはないだろうから」「貧相なじじいめ。身の程知らずが」

　それは見るも無残な光景ではあったが、奇しくも、去るメンドルプも後姿を見送るアルチニアも、同時につぶやいていた。
「化学者を舐めてもらっては困るわ」、と。

「アンベレオは化学者にどんなことができるか、知らないのです。知る気もありません。彼らは黄金に目が眩んだ亡者でしかないのよ」

　アルチニアが明かした″計画″に。アマセオは戦慄した。それはまさしく時限爆弾だった。

532.

　総督府の豪華な私室で、シパドはファッションショーに興じていた。煩雑な準備段階を終え、レガリオ王の一行はベレオーサ市内へ入り、あちこち練り歩き、本国から追随してきた大勢の参加者は観光客となってそれぞれ好き勝手に市内観光を楽しんでいる。総督閣下は時折バルコニーに出て、彼らに手を振ってやらなければならなかった。そのための衣装選びだ。恐るべき数の衣装が用意されていた。それらに合わせた装身具をも合算すると、その総額にドゥルは目の玉が飛び出る思いだった。けっこう裕福なベレオーサ家だったが、（やっぱりこいつはおバカだった）とつくづく思ったものだ。

　街中は連日のお祭り騒ぎで賑やかに華やいでいるのだが、ドゥルはうつうつとした気分で部屋に閉じこもっていた。彼はひたすら祈っていた。無事、この期間が終わりますように。おバカな妹が余計なことをしませんように。あれやこれや。もはや誰も彼女に影響力を持たない以上、兄としては天に祈るほかないという有様だった。

　一生懸命にお祈りしていたので、部屋の外がなにやら騒がしいのには気がつかない。部屋の扉を静かにかつ慌ただしくノックされて、舌打ちしながらやっと顔をあげる。
「いったい何事だ！　今忙しいんだが！」
「は、申し訳ございません閣下、じつは……」
「――なんだと！！」

　泡を食ったドゥルは肥えた体をゆすりながら全力で走った。そんな、バカな――　頭の中をその言葉がぐるぐると廻っている。やっと妹の私室に辿り着いた時、彼のガラスのように脆い心臓は壊れかけていた。

「――――」
　室に入り、声もなく目を瞠った。そこに男がひとり。そして奥にはあられもない下着姿の妹。ドゥルは震える指を妹に付きつけ、息も絶え絶えに声を絞り出した。「なにか

着んか！！　はしたない！！」それから男に向かって……その姿を頭のてっぺんからつま先まで、まじまじと、目を上下させた。

　洗練された美しいラインの細身のチュニック。細いパンツ、そしてターバン。その服装はドゥルが知る限り、黄金門の皇帝家の者の正装だ。

533.

「そなたがシパド姫の兄君？」男は言った。ごく普通の口調で。ドゥルはただうなずくしかできない。

「兄上」鋭く冷たい声が飛んだ。そのへんにあるものを適当に羽織りながらシパドの目は男だけを見ている。「部屋に入らないでくださらんか。用があるときはお呼びする。あたしはこの者と話がある」

「バカな！　未婚の若い娘がそんな恰好で、男と一つ部屋になどと！！」

　ふん、と鼻をならしたシパドは、「これはあたしの夫だ。兄上には一度紹介したはずだ。名を、バイスロイという」

　それを聞いてドゥルがなぜ絶句したのか、シパドにはわからない。ドゥルは再び「バカな！」と怒鳴った。「いやこれは貴殿に言ったのではないぞ、妹にだ。シパドよ、バカも休み休み言え、おまえは黄金門の皇帝家と婚姻を結ぶつもりか！？」

　シパドは一瞬きょとんとしたが、大口をあけて笑い出した。

「兄上兄上。いくら私でもバイスロイが黄金門の皇帝家の後継者の名だということくらい、知ってるわ。けれども、この男の場合、それは単にあだ名だ」

「――では本当の名は？」ドゥルはごくりと喉を鳴らしバイスロイに尋ねた。

「バイスロイ」

「バイスロイ、相手にしなくてよい、さ、こちらへ。兄上、なんども言わせるな、出てってくれ」

　シパドの圧力に気圧されて部屋の外へ出ると、侍女たちが遠巻きにしていた。ドゥルはげっそりとした。白昼にこんなに大勢の目撃者がいてはもうごまかしようもない。未婚の女総督が若い男を部屋に招き入れたという噂は……事実は、瞬く間に広まってしまうだろう。

534.

　ミクトランでさんざん傷めつけてぼろぼろにしてしまった衣装はシパドの手下の誰かがとうに処分してしまったので、バイスロイは王室御用達の仕立て屋に、これこれこういうのを、と細かに注文をつけて新調した。旅行着だの夜会服だの、注文は大量に入ってくる時節柄である。仕立て屋はとくに不思議にも思わず言われた通りの品を作って収めた。
　王室御用達とはいえ、メッサナの縫製技術にはやはり負けるかな、とちょっぴり思ったが、久しぶりに自分自身に戻ったという実感はあった。彼は一方的にあてがわれたものを結結諾々と身に着ける性分では、なかったのだった。

「さて」、とバイスロイは改まった態で咳払いする。「まず、その中途半端な服装を正してもらいたい。それからゆっくり話しあおう」

　するとシパドは顎を突き出し、胸を張った。「ぜんぶ脱いでもいいのだが？」

　バイスロイはそれを無視してのけ、扉の外にいる女官を呼び、今出て行った男性を呼び戻すように言い、お茶を三人分、所望した。

＊

「もっとこう、ふつうの格好はできんのか」

「これからバルコニーに立たねばならんのだ」

　ふつうの格好もなにも、シパドの好みは色から形から、とにかくバイスロイの好みとは、ずれている。バイスロイにしてみれば、なぜその配色にこの装飾なのかと、その装飾のシルエットはいかがなものかと、いちいち突っ込まずにいられない。見ているだけでうんざりと疲れてしまうのだ。最初に逢った時の……彼女の好みが入っていない……軍服がいちばんまともだったのにと思う。彼の美意識は繊細なのである。

「こまかいことを気にするな。男のくせに。そなたはあたしの言うとおりにしていればよいのだ」

「勘違いしないでもらいたいのだが。私は話し合いに来たのだ。おたくの言いなりにな

りに来たのではない」

「またおかしなことを。なにが気に入らない。なにを話し合うのだ」
　シパドは心底ふしぎそうに尋ねた。ドゥルが戻って来た時、二名はそんな会話をしていた。

「ベレオーサ・シパド、貴女（きじょ）と取引をしたい」

535.

「取引――」

「そのための話し合いだ。兄君には立会人として同席していただきたい。必要ならば記録を」

　バイスロイに目で促され、ドゥルは言われた通り、いそいそと記録の準備をした。シパドはふしぎそうにその様子を目で追っている。

「まず訊こう。最初に断わっておくが、これはあくまで『質問』だ。私が何か尋ね、貴女（きじょ）が答えたとして、それは質問に対する答えだ。まあ単に、そなたの希望、だ。希望がかなうかどうかは別問題だ。よろしいか」

　シパドは憮然とした表情でなにか言おうとしたが、緑色の強い視線に不承不承、うなずく。ドゥルは戸惑い驚き、一言も逃すまいと手を動かす。

「貴女は私バイスロイに何を望むのか」

　シパドはカップに口をつけたままバイスロイを見た。
「決まっている。あたしの夫となることだ」

「ほかには？」
「バルコニーに出る時間なんだが」
「副官に任せたまえ。質問に答えよ。ベレオーサ・シパドの夫となる、それ以外に、バイスロイになにを望むのか」
「……なにも」

　バイスロイはドゥルの記録の手が追いつくのを待っていた。ドゥルの手は震えっぱなしだった。なにが起こっているのかわからない、不安と期待とで。

「貴女（きじょ）の希望がかなうと仮定しよう。つまり結婚が成立するという仮定だ。となると……ベレオーサ家は黄金門皇帝家のもとに組み込まれることになるのだが。そういう認識を、ベレオーサ家の方々はされているのだろうか？」

536.

　ドゥルはそろそろと面をあげ、シパドはきょとんとした。そして兄と妹とは互いを見、バイスロイを見、同時に口を開いた。

「〇〇〇〇、〇〇！！」

「△！　△△△△、△△△△！！」

　バイスロイは片手をあげて二人を黙らせて言った。「おひとりずつ。どうぞ」

「やはりあなたは！！」
「ばかばかしい！！　このクソ忙しいときに！！　茶番もたいがいにせよ！！」
「妹よ、ちょっと落ち着け」
「兄上は黙れ！！　記録など取らんでいい！！　あたしはこの男とサシで話を――」

「ご当主よ、ただ今のシパド嬢の不適当な言葉使いの数々。ベレオーサ家では子女にどのような教育をされているのか。皇帝家と付き合う以上は、このような言葉は改めていただかなければな」

「芸術家ふぜいが！！　なにを偉そうに！！」
「シパド嬢。男同士の場合、そのような物言いは、相手に『喧嘩を売る』ということになるのだが。そう受け取って、よろしいか？」
「――――」
「や、やめなさい妹よ！　このお方と争ってはならん！！」

　ドゥルは青筋をたてている妹を必死になだめながら、頭の中はある図案でいっぱいだった。黄金門の皇帝家と婚姻関係を結んだ場合のバランスシートだ。
　そして、はたと、重大なことに気がついた。
「黄金門市なぞ、巨人族に壊されて跡形もないはずだ」シパドも同じことに気づいて、珍しく冷静に言った。そして鼻で嗤った。「つまりそなたは、滅びた帝国を騙（かた）る者だ」

「私を『騙り』と呼ぶか。どう呼ぼうと貴女（きじょ）の自由。ああ、むしろ……」
　バイスロイは皓歯を見せて笑った。

「割れ鍋に綴じ蓋」

「――どういう意味だ」

「私たちは、お似合い、ということだ」

537.

　ドゥルははらはらと手を揉みながら二人を交互に見ている。シパドは今の強烈な皮肉に気がついているのだろうか。だとしたら次の瞬間には恐るべき癇癪が！　はたしてバイスロイ氏の運命は！？

　しかしシパドはしれっと言ってのけた。「今さら何を言っている。そなたがくにに何十人もの妻を持っていようが、そんなことはかまわぬ。この地ではあたしが法律……」

「ああ、その話はウソだ」

「ウソ――」

「その話はウソだが、婚約者がひとりいた。トラブルがあって破談になってしまった。今はきれいさっぱり独身だ。喜ばしいことに、誰とでもなんの障害もなく、めでたく結婚できるぞ」

「あたしと結婚する、と？」

「そなたの望みだろう？　なにか不満なのか？」

　傍観しているドゥルにもなにがなんだかわからなくなってきた。バイスロイの自称する身の上も人格も間違いなく高位の身分を表していると思うのだが、その一方で韜晦されているという気もする。シパドの言うように、この男はただの騙り、詐欺師かもしれない。だが、シパド自身は、そんなことはかまわないと言っているのだ。我が妹ながら――底なしの――

「そなたは私と結婚する。ベレオーサ家は黄金門皇帝家と婚姻関係を結ぶ。一挙両得ではないか。当主どのはなにを心配されているのか？」

「い、いいいいいやその」

「黄金門は土地を失ったが皇帝家の血を引く私がいる。皇帝家の血はひじょうに強い。数世代のちには、ベレオーサ家は一新されてしまうだろう」驚くドゥルに向かってバイスロイは声を潜めた。「ベレオーサの子孫が王位に就くのも夢ではないのだよ」

　ドゥルは胸を押さえてあえいだ。その話は噂として耳にしたことがある。それゆえ、皇帝家は外国との婚姻にひじょうに慎重なのだと。受け入れる側は血を刷新されて栄える場合もあれば、逆にアイデンティティを失ってしまう場合もあるという。いずれにしても子孫は元の民族とは替わってしまう可能性が高いのであって、どちらも慎重になるのは当然。結果が吉とでるか凶とでるか、誰にもわからない。まるでギャンブルである。
　と、頭でわかっていても、皇帝家の後継者を自信たっぷりに自称する男のささやきは、ドゥルの心を大いに動かしたのだった。

「覚えておいでか、最初に私は、取引、と言った。私の血をベレオーサ家へ差し出すかわりに。そちらからいただきたいものがある」

第三十六章『黄金門の詐欺師』

第三十七章へ続く

第三十六章のあとがき

メキシコ・オアハカ州にミトラ神殿という遺跡があります。Wikipediaなどでは、『この神殿は西暦1200年前後に造られたものでスペイン人が到着した十六世紀にも機能していた。ミトラとは死者の国を意味するミクトランからきている。また、この地域はテオティワカンと友好的な交流があった』といいます。たしかに外壁の抽象的な幾何学模様は、えらく近代的な印象があります。それも彫ってあるのではなく、石を組み合わせて浮き彫りにしてある。その技術も凄い。

ミトラの近くの洞窟群ギラ・ナキツには、先史時代から狩猟採集民が植物を栽培していたり石器を使っていた痕跡があり、狩猟採集から定住化までを示す一連の発展を示すものであるという点で世界遺産登録されています。
ミトラ神殿もその時間軸上にあるということなのでしょう。

フランシスコ・デ・ブルゴア（聖職者　1600－1681）が1674年に書いた文書のなかでこの神殿について、『4つのホールがつながった巨大な地下神殿があり、そのうち1つのホールには深い洞窟につながる石の扉がある』と言及しています。が、その後、地下の神殿は埋められ、地上部分にはキリスト教会が建てられてしまいました。現在の聖パウロ教会の場所が主神殿だったということでしょうか。ちなみに、ブルゴアの記述が正しかったことが近年の科学的調査で証明されています。

St.ジャーメインによると…ミトラはインカ文明が隆盛をきわめたころ植民地の首都として建設されたというのです。建設者であるインカの女性祭司への敬意からその名を取ってミトラと名づけられた、と。
神智学では、『かつてのアトランティスの残照のような（輝きが消えかかった）国家が14,000年前、メキシコとペルーに建設された』

メキシコ（テオティワカン）とペルー（インカ）。
かつてのアトランティスの輝きとはどんなものだったのか、想像もつきません。

作中ではミトラという名は使わず、ルカティマ（lctinMa）としました。ミクトラン　（Mictlan）のアナグラムです。

2024年4月8日　記

これまでのあらすじ

第一部
はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可と依頼によるものだった。
ネウトラ評議会・学術調査団の団長ダーヴェとヒューダーとがホシナ族のもとへやって来た。絶滅危惧種・巨人族の調査のためである。しかし巨人族の姿は見えず、ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤが行方不明になる。ダーヴェの痕跡を追って島を発った団員ヒューダーとヤスウは移動中に緊急事態信号を捉えた。ヒューダーは信号発信元のエウメロス王国へ、ヤスウはダーヴェを追ってケストル王国へ向かう。
エウメロス王国は巨人族の大群に襲撃されていた。ヒューダーの説得で国王は城を棄てて避難、ケストル王国へ赴いたまま帰国できずにいる王女ヘルガを迎えに、近衛隊長レルはヒューダーと共にケストル王国へ。
エウメロスとの国境付近にはケストルが密かに造った離宮と闘技場があった。そこにはヘルガ王女もマミヤも捕らえられていた。ヒューダーたちは評議会の人間として離宮に入り込むが、ひとりの少年を密入国させたとして捕らえられてしまう。
成り行きからヒューダーは少年にイリチヤという名を与え、闘技場で戦うことになる。

第二部
エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……
一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。行き場を失い、郊外の湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。
同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々とを恐怖に陥れようと画策していたのだった。

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理パルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

第三部
黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。
ある日、アマセオの妻に三つ子が生まれたという知らせが届いた。自身も三つ子であるアマセオは困惑する。三つ子は王位継承の証しであり、その存在は間違いなく混乱をもたらすからだ。
妻子に逢うため帰郷したアマセオは、妻の兄タマシギと語りあううち、タマシギが秘める野望を知る。機織りのシトリ族の立場を盤石なものにしたいがために、タマシギは禁忌に手を染めていたのだ。アマセオが己の前に立ちはだかろうとしているのを感じたタマシギは政庁のフツヌシに訴え出る。フツヌシは王の兵士であるアマセオがホシナ族に接近していることをかねてより懸念していた。
そんな折、三つ子が怪鳥にさらわれるという事件が。怪鳥の正体はアマセオの弟だった。生後すぐに間引きされた弟カガセオは、手をかけたタマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のために手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

黒曜石事業の権利を拡大解釈したとの理由で、フツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。そこには王位継承が絡んだ陰謀が大きな影を落としていた。現王と深い関係にあるホシナ族、ホシナ族に近づくアマセオは陰謀と戦いに巻き込まれたのだった。
ホシナとアマセオは旧知のヤサカオの助力を得、フツヌシ軍を迎え撃つ。

第四部
母国エウメロスへ帰還した王女ヘルガを待っていたのは、黄金門市の皇帝。彼らもまた巨人族襲撃によって故郷を失っていたが、その際エウメロスの国土へ直行したのは、そこには太古の地下都市・『トゥランの七つの洞窟』への入り口があったからだった。
巨人族の跳梁に、地上での生活を諦めねばならなくなったエウメロスと黄金門の人々は地上への出入り口を閉じ、地下都市へ向けて地下道掘削に取りかかる。

同じころ、ネウトラ評議会は巨人族を殲滅させるべく原子爆弾の製造に乗り出そうとしてメッサナの化学者団と決裂する。爆弾製造の協力者として名乗り出た評議会西支部のコパーン博士は、製造工程の最後に使う素材、ブルー・マーキュリーを無人偵察機に搭載して送り出すが、偵察機はケストル王国北方の氷河地帯で制御不能に陥る。
ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっている皇帝の息子バイスロイ救出に向かう。
世界の果ての島からホシナ族に同行してきたスクナは旧知のヘルガと合流し、ケストル王国へ向かい、氷河決壊に巻き込まれる。

第五部
　太古の偉大な種族は世界中を結ぶ転送システムなるものを構築していた。そのステーションのひとつがケストル闘技場の地下にあり、ヘルガたちをいずこかへ転送する。彼らが到着したのは冥界最下層ミクトランであり、迎えたのは行方不明になっていたネウトラ評議会のダーヴェだった。
ダーヴェは仲間のヒューダー、イリチヤと共に巨人族を探索してミクトランへとたどり着いていたが、あまりに広大複雑な異次元空間での探索は遅々として進んでいなかった。しかしヘルガ、スク

ナ、バイスロイが合流したことによってメッサナで起こった音楽生迫害事件について情報交換が行われる。迫害されたメルノとバイスロイとは深い繋がりがあったのだ。メルノが今はミツハと名乗り、その外見がイリチヤに酷似していると知ったヒューダーは困惑する。かつて水精霊から生まれた子が名を取り上げられ無力な水棲生物に姿を変えられたという。『ミツハ』とは水精霊を意味するのだ。世界の果ての島からついてきたイモリに、イリチヤ＝槍と名づけたヒューダーだったが、彼に戦いを宿命づけてしまったかもしれないことに責任を感じる。
スクナとヘルガとはミクトラン脱出を敢行、そして、ミクトランの怪物が大挙して襲い来るさ中、イリチヤはミクトランの女王テクトリの手に落ち、巨人族生成の現場を見せられる。

第六部
テクトリらの前に突然現れた男は、底知れない力でテクトリとベネトナシュの巨人族増殖計画を簡単に握りつぶしてしまった。イリチヤの懇願によってダーヴェたちは地上、メッサナへ送られ、イリチヤは連れ去られてしまう。事態のあまりの急転はダーヴェたちに無力感と敗北感とをもたらし、メッサナ住民と苦楽を共にしてきたジャガーはアンベレオ王国の命令で全頭が捕獲されることに。ヒューダーはマミヤと再会し、つかの間の安らぎを得る。

そんな折、放火されたメルノの実家の前でバイスロイはひとりの女に出会う。ベレオーサ・シパド。彼女はアンベレオ本国から乗り込んできた先遣隊長で、バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受け、彼にメッサナ奪還記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。記念硬貨に刻まれるモデルとは、神の代理人たるイリチヤだった。

メッサナ市はベレオーサ市と改名され、新総督となったシパドはバイスロイに求婚するが、断られる。このことに逆上したシパドは意趣返しに次々と恐ろしいことを企み、全市民を恐怖に陥れるのだった。

奥付

Salamander in the circle

第三十六章　**黄金門の詐欺師**

2024年4月10日 初版発行

著者　　峯村　明　E-mail

表紙素材　「月とサカナ」　イラストAC

制作　　Puboo

発行所　　デザインエッグ株式会社